The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	1895年の四都竹枝詞 : パリの歌
Author(s)	深澤, 一幸
Citation	言語文化研究. 2009, 35, p. 141-160
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9710
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

1895年の四都竹枝詞——パリの歌

深　澤　一　幸

本論文要探討的是公元1895年這個世紀末的世界動亂時期，一個有中國古典素養的知識分子潘乃光，偶然出去海外，在文化粲然的歐洲四國首都裡看見甚麼，有甚麼感受，怎樣表現為詩歌。作為一個參照系，著者引用了日本的還是有中國素養的知識分子中井弘的詩歌，以便比較日中兩國知識人面對歐洲先進文化時的一些不同。本文主要分析了他們在巴黎的詩歌。
キーワード：海外竹枝詞、使俄草、漫遊記程

1

1894年、清国では光緒皇帝の二十年、日本では明治２７年、西太后六十歳の祝賀および湖北布政使３年任期満了の挨拶のため北京に上った五十三歳の王之春は、頭品頂戴・湖北布政使の身分で清国の出使俄国大臣としてロシアに派遣されることとなった。その名目は、この年の１１月に逝去したロシア皇帝アレクサンドル三世を弔問し、新帝ニコライ二世の即位を祝賀するというものだった。なぜ王が選ばれたかといえば、３年前の光緒十七年、かれが広東布政使の職務を署理していた時、病気の広東巡撫劉瑞芬に代わって、清国を訪問したロシア皇太子ニコライ二世を接待したからである。

ところで、1894年といえば、日本と清国との間に日清戦争が勃発したまさにその年であり、王らの派遣も表向きは弔問祝賀使節だったが、じつはロシアの力を借りて倭人を制するという政治的意図を秘めていたのだった。しかし、1895年に出発したかれら一行がロシアから帰らないうちに、清国講和全権の李鴻章は休戦を定めた下関条約に調印してしまった。つまりこのロシア派遣は所期の目的を達することができなかったのである。それゆえ、王らは帰国の途中、わざわざパリに滞在し、フランス政府と密約をかわし、台湾をフランスに租借させるかわりに、フランスが日本に干渉するよう求め、のちに遼東半島を返還させる三国干渉として結実した。

それはともかく、王之春は７ヶ月にわたるこの旅行によって、フランス・イギリス・ドイツ・ロシアの諸国を歴訪し、各国の最新の政治・経済・社会の事情を実見することができた。そこで、かれは1895年、光緒二十一年に帰国すると、朝廷に自強新政八か条を奏上し、鉄道の建設、商業工業の重視、鉱山の開発、科挙の改革などを主張した。同年、この使節

としてロシアに往還した行程を詳細に記述した日記「使俄草」８巻も、「奏稿条陳」１巻「図」１巻を付録として、上海文藝斎から刊行された。わたしがこれから読もうとする詩歌には、この日記中に記されたかれの竹枝詞も含まれている。がその前に、この王之春という人物のあらましを紹介しておきたい。

王之春（1842 ～ 1906）、字は爵棠、また芍棠、号は椒生、湖南省清泉（今の衡南県泉渓獅子坪）の人、道光二十二年に生まれる。明末清初の思想家王夫之の８世の従孫である。若いころは幕府に身を投じ、曾国藩、李鴻章らに随って華北・西北の数省を転戦し、文武両面の才幹によってかれらに賞賛任用された。

同治から光緒にかわる1870年代には、王は李鴻章や彭玉麟の部下となり、北塘の海口（今の天津市海河口あたり）や江蘇省鎮江一帯を警護した。また、アヘン戦争の教訓を伝えるため、かれは民間に伝わっていた無名氏の抄本「英夷入寇記」（じつは魏源の著作）を改編して「防海紀略」を刊行し、愛国思想をかきたてた。さらに光緒五年（1879）ごろには、清の順治から同治までの中外交渉の資料を編成して「国朝柔遠記」２０巻をあらわし、開国以来二百余年間の中外交渉の歴史を記述し、世界各地の概況を紹介し、おのれの洋務思想を解説した。この書は、光緒十七年（1891）に広雅書局から刊行され、当時の洋務派人士にかなり重視されたのである。

この同じ光緒五年の初めから清とロシアのイリをめぐる交渉が緊迫していた間、日本は４月琉球藩を廃止し沖縄県を置いた。清国は５月日本に抗議するとともに、日本の動向を把握するため、南洋大臣・両江総督たる沈葆楨が中外交渉に精通していた王之春を日本に派遣して軍備などの諸事情を偵察させた。かれは十月二十一日（1879年１２月７日）に上海から出航し十一月二十四日（1880年１月５日）上海に帰着するまでの往還三十日余り、長崎・大阪・神戸・横浜・東京などの地を遊歴し、実情を把握すると、帰国後、北京の朝廷におもむき、万言の意見書をたてまつり、外交政策を陳述し、みずから兵を率いて琉球を清に取り戻すことを請うた。この意見は受け入れられなかったが、かれの愛国的熱情は十分に察することができる。そしてかれはこの日本旅行での見聞や感想をまとめ、「談瀛録」３巻として光緒六年（1880）秋、上洋文藝斎から刊行した。巻一、巻二は「東遊日記」で旅程を詳細に記述し、巻三は「東洋瑣記」で日本の地理・戸口・租税・兵制・官制・国債・物産・教育・風俗などを簡潔に紹介する。冒頭の彭玉麟の序には「言は簡にして義は<ruby>該<rt>そな</rt></ruby>わり、日国の情形を<ruby>俾<rt>し</rt></ruby>て一たび翻閲して<ruby>瞭<rt>あき</rt></ruby>らかなること指掌の如からしむ」、「誠に日を防ぎ以って俄を防ぐの<ruby>秘鑰<rt>ひやく</rt></ruby>にして、亦た日を服し以って俄を服するの<ruby>韜鈐<rt>とうけん</rt></ruby>也」と褒めあげている。また、巻一には「東京雑詠」８首、巻二には「東京竹枝詞」１３首がおさめられている。

光緒九年（1884）に始まった清仏戦争のころ、王は広東省に赴任して、雷・瓊兵備道や高・廉兵備道の職につき、清仏双方が清とヴェトナムの国境を策定する協議に参加した。この協議での功績により、後にかれは広東按察使に昇進し、かつ広東布政使の職務も署理することになった。この時にロシア皇太子を接待して、それが光緒二十年のロシア派遣に結び

ついたのである。

ロシアから帰国後の王之春についていえば、光緒二十四年（1898）、かれは四川布政使として余棟臣の乱を鎮圧し、その功により山西巡撫に昇進した。のち安徽巡撫にうつり、光緒二十七年十月には、湖北候補道李宗棠を日本教育視察に派遣したりした。光緒二十八年（1902）、かれは広西省に派遣され、柳直が率いる農民の大乱を徹底的に鎮圧した。そのときの有様は、「人命は已に将(まさ)に殺され尽さんとし、人肉は已に将に喫(くら)われ尽さんとし、人口は已に将に売られ尽くさんとす」（李伯元「南亭筆記」巻十二）と報告されるほど悲惨だった。そして、広西巡撫の任にあったかれは、広西の鉄道・鉱産の権利を譲渡して、フランスから兵や金を借り、それでこの内乱を平定することを主張したらしい。そこで、光緒二十九年（1903）春、上海などの愛国人士や日本の清国留学生が次々と「抗仏」大会を開き、清朝政府に電報を打ち、王の職務罷免を要求した。全国民の怒声のなかで、王は同年閏五月職務を解かれた。

翌光緒三十年（1904）、まさに日露戦争のさ中、王之春は退職巡撫の身分で上海にいたが、ロシアと連合して日本を防ぐことを提唱し、連日ロシアの武官や領事に会っていて、それが愛国人士の憤懣を引き起こした。十一月十九日、かれは上海イギリス租界四馬路の洋食レストラン一枝春で、黄興と関係する愛国人士万福華に銃で狙撃されたが、未遂におわり、万は逮捕され、同じ嫌疑により投獄されたものは、黄興・章士釗ら十余人にのぼった。そして、王は光緒三十二年（1906）に卒し、光禄大夫・建威将軍を授けられた。

なお、かれの著作は豊富で、すでに述べたもののほかに、詩集たる「椒生詩草」６巻（光緒十年、上海文藝斎）、「椒生続草」６巻（光緒十四年、上海文藝斎）、清代の政界逸聞・名人掌故・詩詞聯語・名物考証などを記した「椒生随筆」８巻（光緒七年、上洋文藝斎）、家譜や他書により先祖王夫之のそれまでの年譜の誤りを正し欠けたるを補ったより詳細な「先船山公年譜」前編１巻・後編１巻（光緒十九年）、「国朝柔遠記」の附編「蠡測卮言」十三篇のオリジナル「瀛海卮言」１巻（光緒十一年、広州味古堂）、「王大中丞椒生奏議」などがある。

2

ところで、1895年の王之春のロシア使節に随行したもののなかに、挙人で幕僚を生業とする潘乃光（1820 ～？）がいた。かれは原名は志学、字は晟初、号は荔荘、広西省荔浦（いまの広西チュワン族自治区荔浦県）の人。「榕陰草堂詩草」１４巻（光緒十九年）、「榕陰草堂文剰」２巻（光緒十九年、上海文藝斎）、「乃光原堂詩文」、「遊粤草」などの著作がある。

この潘は旅行のあいだ、訪れた各地で当地の社会・風俗をうたった竹枝詞を百首あまり作り、帰国後のやはり光緒二十一年（1895）七月、「寄所託斎戯れに編す」というクレジットをつけて、これらの作を「海外竹枝詞」の書名で石印本にした。「竹枝詞」とは、も

ともと四川東部や湖北西部一帯に流布していた民歌。中唐の劉禹錫が夔州刺史のときにこの民歌を洗練して文人の風格を加味し、その新作が評判になると、同時や後世の詩人たちもつぎつぎに作りだした。元明以後は歌唱から離れて、文人たちが訪れたり滞在した各土地の山水風光・民俗風情を詠じる詩体となった。その詩形は七言四句で、古典詩の七言絶句と似ているが、韻律は絶句ほど厳格ではなく、用語は明快流暢を旨とし、民歌の情緒を多少帯びている。なお、「雑詩」「雑詠」「雑事詩」などともいうが、「竹枝詞」と同類である。

ここで潘と出使大臣王之春との関係を知るために、「光緒二十一年乙未春三月中澣、晟初自ずから巴黎の使館に於いて識す」と後書きする潘の自序をあげよう。

天下の大なる、何の有る無き所ぞ。見聞の及ばずして、敢えて論議せ弗(ざ)るも、豈に寡言ならん哉(や)。良(まこ)とに風土人情の、未まだ耳を以って目と為すに便ならざるを以って也。予は年は知命（五十歳）を逾え、亦た已に遊ぶに倦みたり。但だ奔走すること三十年、足迹は幾(ほと)んど天下に遍ねきも、而も重洋阻隔して、未まだ域外の観を為すに及ばざるは、憾事に非ず乎(や)。

去秋、鄂藩（湖北省）の王楙生（之春）星使は京に在りて祝嘏礼を成し、逡(ただ)ちに復た旨を得て俄国唁慰使に充てらる。余を以って老友と為し、壮志有り遠遊を愛するを諗知せらるれば、同行して参賛と為さんと約さる。竊かに念(おも)えらく、此の使は創挙為(た)り、友邦に聯し、夷情に通じて、第(ただ)に国を越え都に過り通商和好すること駐使の厥の職に負(そむ)く無きが如き已(のみ)には非ざる也。時に随い地に随い、耳に入り心に縈わる。其の国体を尊び時局を開く者は無論なり。即(たと)え風を采り俗を問い、之を卑くして甚(なん)の高論も無きも、亦た欠きて講ぜざる可からざる也、と。

暇有らば輒ち歩に信(まか)せて遊歴し、過りし所の境は、目前に在るが如し。戯(たわ)むれに竹枝を為し、以って一二を紀す。之を久しうして百余首を得たり。曩日の出使参随の未まだ暇まあらざる及び道(い)うに屑しとせざる所と為す者は、従いて之を筆にす。我が多事を笑う毋(な)きを得ん乎(や)。然れども俗を異にして風を同じうするは、自のずと怡悦す可し。聊さか飽食の心を用いる所無きに勝(まさ)らば、則ち得たり。

さて、ここからは潘が「戯」むれに作った「百余首」の「竹枝」詞から、かれが最初に訪れたフランスの首都パリを詠じたものを選んで読むことにしたい。そこでまず、かれらがいかにしてパリまでたどりついたかを、主に「使俄草」の記述によりつつ述べることにする。光緒二十年十二月初十日（1895年１月５日）、王之春は襄弁の楊宜治、参賛の潘乃光、随員の蒋金生、馮澤霖、徐啓書、魏業簾、繙訳の李寿田、聯恩、武弁二人、整容一名、厨役一名、僕従九名を随えて、上海の呉淞口からサラチ号に乗って出航した。そして、シンガポール、インド洋、紅海、地中海を経て、巻三によれば、光緒二十一年正月十三日（1895年２月７日）、フランスのマルセイユに上陸した。十五日の夜には汽車に乗り、十六日の朝、

パリに到着。しかし翌十七日の晩には、ベルリンに向かう汽車に乗った。この滞在は一日あまりに過ぎなかったのである。そしてロシアのサンクト・ペテルブルグに赴き、主要な任務をすべてこなした後、また汽車でベルリンにもどり、ロンドンを訪れてから、巻六によれば、三月初四日（３月２９日）ふたたびパリに戻ってきた。そして五月初一日（５月２４日）の晩に出発するまでの２ヶ月ほどは、パリに滞在したわけである。

さて、潘の竹枝詞を読む準備はもう十分整ったようにも思われるが、ここでもうひとつの日本人からの参照資料として、明治維新の志士中井弘（ひろむ）（1838 ～ 1894）の海外竹枝詞をあげておきたい。かれは桜洲と号し、鹿児島藩を脱藩したのち土佐の後藤象二郎の出資により、慶応二年（1866）渡英、翌年帰朝した。この漫遊の日記は、まず慶応四年（1868）に「目見耳聞西洋紀行」上下２巻（敦賀屋為七、大坂）として出版され、明治３年（1870）にも「西洋紀行航海新説」として大阪の堺屋仁兵衛、伊丹屋善兵衛らの版があるが、詩は日本からロンドン到着前までで終わっている。

かれはまたおそらく左院四等議官として、明治６年（1873）ヨーロッパからアメリカをまわって、川村純義・九鬼隆一・松村淳蔵・谷元兵右衛門・末川某とサンフランシスコから太平洋の郵船に乗り、１１月に帰国した。この漫遊の記録は、明治１１年（1878）に「漫遊記程」上中下３巻（博文堂、東京）として出版されたうちの巻下「附録」にあたり、「欧米名区之詩文」と題簽にしるすごとく、ロンドンやパリの雑詩などを収める。

かれは、明治７年１０月、公使館書記生に転じ、３年間英国公使館に在留したのち、明治９年（1876）１月３１日にロンドンを出発し、４月２８日上海に到着した。この帰途の日記は、さきの「漫遊記程」のうちの上中２巻にあたり、巻上「魯西亜土耳基漫遊記程」、巻中「土耳基希臘埃及印度漫遊記程」と分かれるが、その巻上には、ベルリンやサンクト・ペテルブルグの詩を載せる。なお、この二書に収めるすべての漢詩は、横山詠太郎編「桜洲山人遺稿」（明治２９年１０月）巻上にも収められている。

3

それでは、潘乃光の「海外竹枝詞」（王子今・王慎之輯「清代海外竹枝詞」北京大学出版社、1994年10月）から「巴黎」１５首を見ていこう。まず第一首。

離城百里遠分防　城を離るること百里　遠く防を分かち
興廢循環一戰場　興廃は循環す　一戦場
衆志成城休自主　衆志は城を成す　自主するを休（や）めよ
那須設險鞏金湯　那んぞ須（もち）いん　険を設けて金湯を鞏（かた）くするを

自注には「法都の炮台は皆な百里の外に在り。普法戦争は猶お昨日に在り。現に民主国

と為る」とある。モンバリヤン砲台をうたったこの詩の事情については、わが久米邦武編の「特命全権大使米欧回覧実記」（田中彰校注、岩波文庫、第３冊、1979年12月）巻４５「巴黎（パリー）府ノ記四」明治６年（1873）１月１７日に「十一時ヨリ馬車ニ駕シテ、府ノ西鄙外ナル「モンワレヤン」ノ砲台ニ至ル、此ハ凱旋門ヨリ約二英里許ノ西ニアリテ、突兀（とつこつ）ノ岡上ヲ占メテ築キ起ス、路易非立（ルイ・フィリップ）王ノトキニ成リタルモノニテ、巴黎周囲ノ要害ニ於テ、最モ肝要ナル地形ヲ占メ、其備ヘ厳重ナルコト、名高キ砲台ナリ、去ル七十一年ニ、普国ト媾和ノ議ヲハシメシトキ、普ノ執政「ビスマルク」氏カ、此山ヲ普国ニ渡サハ、和議ヲトヽノフヘシトテ、和議ヲ拒ミシモノナリ」とあるのが参考になろう。さらに具体的に理解するには、わが中井桜洲の「榎本（武揚）翁ニ伴ヒモンバリヤン砲台ニ登リ感アリ」と注した「巴里斯府雑詩」（「漫遊記程」巻下）を引くのがよいだろう。

巴黎城郭一望看　巴黎の城郭　一望に看
十六砲臺戰後寒　十六の砲台　戦後に寒し
吟客登臨無限感　吟客登臨す　無限の感
歐州猶未保平安　欧州は猶お未まだ平安を保たず

桜洲は解説して「巴里郭外ノ尤モ高ク秀テタルハ「モンバリヤン」ノ砲台ナリ。孛軍（プロイセン）此塞ヲ砲撃セシニ終ニ其功ナク又一揆（コンミヨン）党ノ乱ニ此砲塞ヨリ府内ヲ眼下ニ射撃シテ大ニ功ヲ奏セシ至険ノ砲塞ナリ。欧州兵乱底止スル所ナシ。文明ノ太平ヲ唱フルハ何ノ年ニカアルヤ」という。つぎは第二首。

通衢創作木頭街　通衢　創作す　木頭の街
板面平舗下積柴　板面平らに舗（し）き下は柴を積む
車馬無聲行坦坦　車馬は声無く　行くこと坦坦たり
三年一換當官差　三年に一たび換えて官差に当（あ）つ

自注には「街は直木二尺許りを用い、竪立して椿（くい）を打ち、上は蓋うに板を以ってす。然れども只だ一両処耳（のみ）」とある。「二尺」６４センチほどの「直木」とは、木レンガのこと。舗石での支出を減らすため、パリでは木レンガによる道路舗装が始まった。しかし1872年のエコール＝ド＝メドシーヌ広場での実験は失敗で、三年後には木レンガの舗装を取替えねばならなかった。のちサン＝ミシェル大通りなどで、タールを塗ったモミ材を二重に重ねて床とし、この弾力性ある土台の上に舗装した。1895年ごろはフランスの「木レンガ舗装株式会社」がグラン・ブールヴァールなどの舗装を請け負っていた。つぎは第三首。

劫灰飛盡了無痕　劫灰は飛び尽くして了（つい）に痕無く

英武空懐拿破崙　英武　空しく懐う　拿破崙（ナポレオン）
貽誤皆因王好戰　誤りを貽（おく）りしは皆な王の戦さを好むに因（よ）る
山河如故愧倫敦　山河は故の如く　倫敦（ロンドン）に愧（は）ず

「拿破崙」は、「英武」のほまれ高かったナポレオン一世。第三句は普仏戦争を反映するだろう。「愧倫敦」とは、1847年に孫に位を譲りイギリスに出奔し、２年後にロンドンで客死したブルボン王家の前国王ルイ・フィリップを想定するか。つぎは第四首。

經營戲館已三年　戯館を経営して已に三年
百萬佛郎算甚錢　百万佛郎（フラン）　甚（なん）の銭と算う
更闢名園新眼界　更に名園を闢（ひら）き眼界を新たにし
遊人風月喜無邊　遊人　風月　喜びは無辺なり

自注には「城に近き花園は十余処」とある。ここの「戯館」劇場は、1893年にカタロニア出身のジョゼフ・オレがキャプシーヌ大通りに開いたミュージック・ホール「オランピア」かもしれない。「名園」、つまり「花園」は、当時パリ市門の外に次々と開かれた「バル・ビュイエ」のような野外ダンス場をいうか。そこの売り物はカンカン踊りだった。つぎは第五首。

驅車飛過舊王宮　車を駆りて飛び過ぐ　旧王宮
改作官衙誰在公　改めて官衙と作す　誰か公に在る
聞説民曹分十部　聞説（きく）ならく民曹は十部に分かち
共推天德起雄風　共に天徳（デント）を推して雄風を起こすと

自注には「一の総統を推して大伯里璽天徳（プレジデント）と為す」とある。王之春の「使俄草」巻六、三月十三日にも「民主は伯理璽天徳と称す。訳して大統領と言う」とある。「旧王宮」とは、ルーヴル宮からリヴォリ通りをはさんで北隣りに位置するパレ・ロワイヤル。1873年に改修され、政府の法案についてアドバイスし行政上は大審院の役割を担う「官衙」役所たる国事院（コンセイユ・デタ）が入った。「民曹」は政府機関で、「十」の「部」省庁に分かれていた。「使俄草」巻六、三月十七日にパリの「衙署」役所を説明して「其の部為（た）る十二。曰わく内部、庶政を総理し、兼ねて群司を摂（おさ）め、職は中国の首輔に同じく、本国の事件は咸（み）な裁決を聴く。曰わく戸部、専ら出納を司どり、国中一切の財賦税餉は皆な其の主持なり。曰わく商部、通商事務を管（す）ぶ。曰わく農部、民間一切の種植を管ぶ。曰わく工部、凡そ軍械火薬・修治建築は、皆な其の経理なり。曰わく文部、学校を掌管す。曰わく兵部、軍旅を主治し、凡そ調遣一切は皆な其の主政なり。曰わく海部、戦艦を修め、水師を治む。曰

わく藩部、各処の属地を管理す。曰わく刑部、律例を主持し、兼ねて教案を理む。曰わく創例院、軍餉を籌議し、律法を増改するは、皆な其の専政なり」という。つぎは第六首。

高標鐵塔自千古　高く標せる鉄塔は自のずと千古
雅集名園放萬生　名園に雅集し万生を放つ
略比鳶魚上下察　略ぼ鳶魚に比して上下を察し
快如人意喜天成　快よきは人意の如く天成を喜ぶ

ここの「鉄塔」は、フランス革命百周年を記念して1889年にパリで行われた第４回万国博覧会のために建造されたエッフェル塔。ここで王之春が「使俄草」巻七、四月二十二日に収める連作「巴黎竹枝詞」１２首から同じくエッフェル塔をうたった第１１首をあげよう。

雄都坐鎮仰彌高　雄都に坐鎮して仰げば弥いよ高し
塔勢凌空欲駕鼇　塔勢は空を凌ぎて鼇に駕さんと欲す
三百邁當攔四護　三百邁当　攔は四護す
錚錚鐵馬逐風號　錚錚たる鉄馬は風を逐いて号ぶ

「鼇」は、海中に住み、背に蓬莱などの仙山を背負うという伝説上の巨大な亀。それにも「駕」乗りあげんばかりの勢い。「鉄馬」は、巨大な風鈴。

また「名園」は、いわゆる「万生園」で、当時２か所あった動物園のうち、城東のビュフォン通りのでなく、パリの西郊ブーローニュの森にあった馴化園をいうだろう。ここには動物園の他に植物園、水族館もあった。「米欧回覧実記」巻４８「巴黎府ノ記七」明治６年（1873）２月２日にも「此苑（ボアデブロン）ノ近地ヘ、新ニ一ノ禽獣園ヲ設ケ、鳥獣ヲ集ムル頗ル備ル、駝鳥ニ車ヲ服シ、四人ヲ牽キテ走ラセルヲミル」とある。

おそらく園中のおびただしい虫魚鳥獣たちの生き生きしたさまを述べた「鳶魚」は、「詩経」大雅「旱麓」の「鳶は飛びて天に戻り、魚は淵に躍る」にもとづくが、孔穎達の疏には「其の上は則ち鳶鳥の飛びて天に至り以って遊翔するを得、其の下は則ち魚皆な淵中に跳躍して喜楽す。是れ道が飛潜に被り、万物が所を得、化の明察せるが故也」とある。ここで王の「巴黎竹枝詞」から、「万生園」をうたった第１２首をあげよう。

蟲魚鳥獸象都馴　虫魚鳥獣　象は都て馴れ
博物何從問假眞　博物　何に従りてか仮と真とを問わん
招手萬生園裏去　万生園裏に招手されて去けば
眞人來看假麒麟　真人　来たり看る　仮の麒麟を

「仮麒麟」については、「使俄草」巻六、三月十四日、王が万生園に遊んだおり、キリンを見たときの記述に、「麕身・牛尾・一角にして生物を食らわず生草を践まざる者有り。（清国公使館の）慶靄堂は麟也と云う。然れども書には伝えて麟は五趾と云う。今此の獣は四趾なり。未まだ確かなるや否やを知らず」とある。そして「万生園に遊ぶ」と題する古詩も作っている。つぎは第七首。

阿得薄郎譯茂林　阿得薄郎（ボアドブーローニュ）は茂林と訳し
交柯接葉何陰陰　柯（えだ）を交え葉を接して何ぞ陰陰たる
蔵春最好兼銷夏　春を蔵すに最も好ろしく兼ねて夏を銷（け）す
不是知音不便尋　是れ知音にあらずんば尋ぬるに便ならず

自注には「此の処は男女の私会は習いて固（もと）より然りと為す」とある。「阿得薄郎」ブーローニュの森については、ここでも中井桜洲の「巴里竹枝」二首（「漫遊記程」巻下）が参考になる。第１首を引いてみよう。

春滿街頭車馬紛　春は街頭（シャンゼリゼー）に満ち　車馬は紛たり
葡萄美酒帶餘薫　葡萄の美酒　余薫を帯ぶ
遙自凱歌門外望　遥かに凱歌門（アルクドツリオンフ）外自り望めば
綠林原上客如雲　緑林原（ボアデブロニュ）上に客は雲の如し

桜洲は解説して「巴里郭外ノ林ヲボワドブロニユト云フ。園地ノ結構幽雅清浄人造ノ妙ヲ極ム。林中縦横道ヲ通シ馬ヲ飛シ車ヲ馳スルニ便ナリ。其間酒肆茶房士女雑沓実ニ繁華ノ盛ナルヲ想像スルニ足レリ」という。また「米欧回覧実記」巻４２「巴黎府ノ記一」（明治５年（1872））11月17日にも「「ボァーデ、ブロン」ハ、巴黎第一ノ広苑ニテ、米国新約克（ニューヨーク）ノ「センタラールパーク」ニモ、超越スヘキ名苑タリ、凱旋門ヨリ北ナル郭外ニア

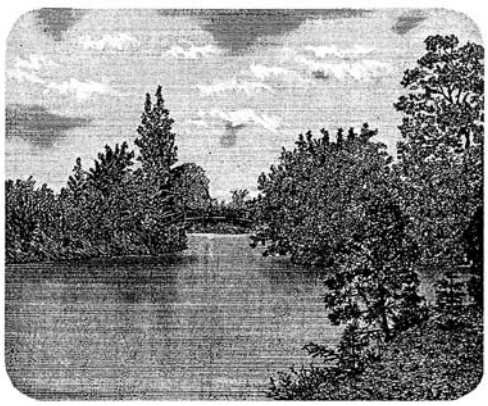
図1 ボア・ド・ブーローニュ（「回覧実記」巻48）

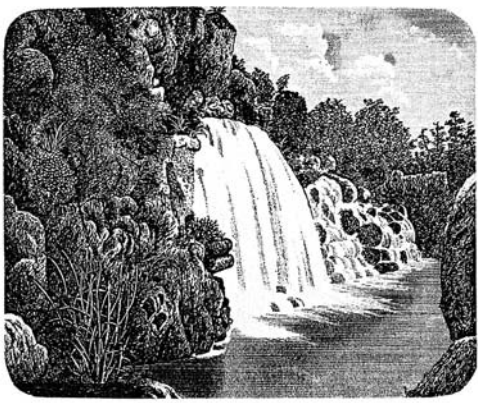
図2 ボア・ド・ブーローニュの滝（「回覧実記」巻48）

リ、「モンワレヤン」山ノ麓ニ於テ、幅二「キロメートル」、袤ハ之ニ倍スル地積ヲ囲ヒ、沼池ヲタヽヘ、島嶼洲嘴ヲツヽリ、懸瀑ヲツクリ、樹木ハ老幹槎牙タルアリ、松籟颯颯ノ林アリ、路ヲ修ムル砥ノ如ク、地ヲ掃フテ塵ヲトヽメス、日曜日ノ夕ニハ、貴豪ノ家、ミナ車ヲ馳セテ来遊ス、車ハ軒華ヲ競ヒ、馬ハ騏驥ヲ較ヘ、衣裳華麗ニシテ粉飾都雅ナリ、広苑ノ内、ミナ車轂相撃チ、馬首車廂ト相銜ム、巴黎ノ豪奢ハ、此ニ観スヘシ、諺ニ曰ク、倫敦ノ食倒レ、巴黎ノ衣倒レト、現地ノ景況ヲミルニ、我ヲ欺カサルヲミルナリ、苑後ニハ禽獣園アリ」とある。つぎは第八首。

守貞殊不與人同　貞を守るは殊に人と同じからず
鐵鎖深嚴勝守宮　鉄鎖　深厳にして守宮に勝さる
不愧佛郎蘇第一　佛郎蘇第一たるに愧じず
王妃留帶挽淫風　王妃は帯を留めて淫風を挽く

自注には「貞を守る帯並びに鎖は博物院に在り」とある。この「博物院」は、サンジェルマンとサンミッシェルという二つの大通りの交差点脇にあるクリュニー美術館だろう。ここは「貴婦人と一角獣」のタペストリーで有名だが、１６世紀のアンリ２世の王妃カトリーヌ・ド・メディチが使用したと伝えられる貞操帯も所蔵している。つぎは第九首。

達克若恩一女流　達克若恩は一女流
村民亦自解同仇　村民も亦た自ずから解く仇を同じうす
至今猶作戎裝樣　今に至るも猶お戎装の様を作し
爲國捐軀鐵像留　国の為に躯を捐てて鉄像を留む

ジャンヌ・ダルクについては、「使俄草」巻七、四月十六日に、「法に奇女子の若恩と名づくる者有り、姓は達克氏、法の亜爾格部の人也」ではじまる王之春の詳しい紹介があり、オルレアン村民も彼女と一緒にイギリス軍と戦ったこと、のちに「法王は若恩の躯を捐て国に殉ずるを以って爵を賜」わったことなどを述べる。この「戎装」戦闘衣装の「鉄像」は、セーヌ河をロワイヤル橋で渡った少し北、リヴォリ通りとピラミッド通りの交差するピラミッド広場に立つ、鎧兜をつけ槍を持ち馬に跨った黄金のジャンヌ像かもしれない。つぎは第十首。

記得當年賽會時　記し得たり　当年賽会の時
大清公所也爭奇　大清公所も奇を争う
祇今小涉都成趣　祇今小しく渉るも都て趣きを成すに
説與華人尚不知　華人に説与するも尚お知らず

「賽会」とは、６年前1889年のパリ万国博覧会で、「大清公所」はトロカデロ庭園内にあったろう中国伝統建築の清国特別館をいう。博覧会の会場は、シャン・ド・マルス、トロカデロ、ケー・ドルセー、エスプラナード・デザンヴァリードにおかれた。「使俄草」巻六、三月十四日に、「城外に出づれば、大清公所と為す。昔年の賽奇会の時に中国の築き以って会に賽(きそ)いし所の者にして、近ごろ已に之を法人に贈れり」とあり、三月二十一日に、「帰途、大清公所に過(よぎ)りて一坐す。遊人は並びに盛んなり。亭中にも亦た音楽(オーケストラ)一部を置く」とある。これをうたった王の「巴黎竹枝詞」第１首をあげよう。

車近平林已出城　車は平林に近くして已に城を出で
無門有軌任縱横　門無く軌有り　縱横するに任(まか)す
猶存古意留形勝　猶お古意を存して形勝を留め
公所當前認大清　公所の当前に大清を認む

王の注に「法京は早(つと)に城無く、僅かに城門の旧址を存するのみ」、「城を出ずれば即ち大清公所。今は加非(カフェ)茶室と為す」とある。また巻七、四月十一日の「樹林の深き処を歩行し、城の旧址に登る。旋(たち)まち大清公所の茶室に至り雨を賞す」詩には「暢好なる楼台は境界を開き、偶然なる茶酒は工夫を破る」とうたう。つぎは第十一首。

空手回來負寶山　空手にて回(かえ)り来たれば宝山に負(そむ)く
店名羅佛認通闠　店は羅佛(ラファイエット)と名づけ通闠を認む
若詢第一金鋼鑽　若(も)し第一の金鋼鑽(ダイヤモンド)を詢(と)わば
豈肯尋常示老慳　豈(あ)に尋常に老慳に示すを肯(がえ)んぜんや

「羅佛」とは、現在でもパリ第一の百貨店たるギャラリー・ラファイエットで、オペラ座の北、オスマン大通り沿いにあり、建物の中は「通闠」物があつまる市場も同様だった。「使俄草」巻六、三月十八日には「随いて羅弗(ラファイエット)大店に往きて一遊す。周囲は里余、旁らは数十門に通ず。楼は凡そ数重、中間は百貨が環集し、類を分かち門を別(わ)かつこと、街市の若(ごと)き有り。櫃を掌どる者は、男女並び集まり、中土の集場に彷彿するも、而も富麗は殆んど比倫す可からざる耳(のみ)。此れは通国公司の貲を集め此れを設けし所の者にして、何人たるを論ずる無く、稍(や)や存蓄有らんと欲する者は、皆な股分に入り、月に按じて息を取る可し。其の総管・分管は各おの事を司どり、各大股東由(よ)り礼拝毎に一次(いちど)査算し、以って去取を定む。蓋(けだ)し法を立つること善くして、弊は自のずと致して生ずる無き也」とある。そして王は「巴黎竹枝詞」第８首でも「羅佛」に言及している。

羅佛奇珍勝□廛　羅佛の奇珍は□（市？）廛に勝(ま)さるも

舊王宮好更流連　旧王宮は更に流連するに好ろし
鐵人最古應無匹　鉄人は最古にして応に匹無かるべし
已逾四千七百年　已に逾ゆ　四千七百年

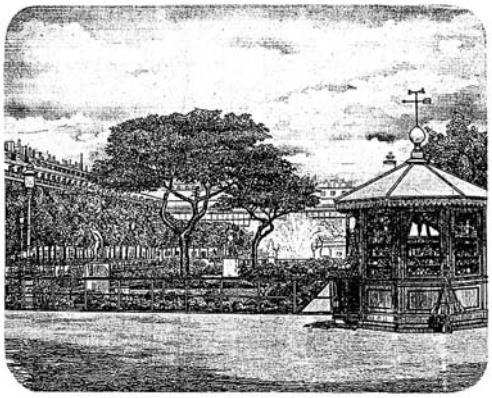

図3 パレロワイヤルの庭園（「回覧実記」巻42）

ラファイエット百貨店と対比される「旧王宮」は、さきのパレ・ロワイヤル。この長方形の王宮の中庭を取り囲む一階の回廊はアーケードになっており、そこにブティック、高級雑貨店、書店、画廊、レストラン、カフェ、酒場、売春宿、カジノ、劇場、蝋人形館など種々雑多な店が入っていた。わが「米欧回覧実記」巻４２「巴黎府ノ記一」、明治５年（1872）11月17日にも「中ニモ「パレイローヤル」宮ハ、中央ニ方庭ヲ抱キタル、大宮苑ナリシヲ、路易第十四世ノ宰相、有名ノ経済家ナル「リセリュー」ノ工夫ニテ、下層ヲ市廛トナシ、百貨ヲ鬻カシメタリ、此処ニハ珍玩、奇器、奢靡ノ品、風流ノ具、金光玉華ヲ聚メテ、攤陳シ売リ、酒店、食店、其中ニ雑リ、中央ノ方庭ニハ、緑樹陰ヲ展ヘ、夜ハ気燈ヲ照シ、四囲ノ市廛ヨリ、百貨ノ光彩ヲ輝カスハ、黄金ノ気、庭ヲ包ンデ起ルトモ謂フヘシ」と描写する。

「鉄人」は、南隣りのルーヴル宮にあった四千七百年前のエジプト王朝の「鉄」のように黒いミイラ像を指すだろう。「使俄草」巻六、三月十八日、「博物院」ルーブル美術館を参観した王は「更に入れば則ち埃及の古棺。皆な空を鑿つこと人身の式の如し。其の蓋には人の面貌を絵がき、儼として塑人の植立するが如し。骸骨一具は、甚はだしくは修偉ならず、色は極めて黝黒なり。此れは数千年前の人にして、地中従り挖り得し者と云う」と述べる。ここで中井桜洲がパレ・ロワイヤルの賑わいをうたった「巴里竹枝」第２首をあげよう。

智闘豪奢圃囿開　智もて豪奢を闘わせ　圃囿開き
無邊佳景絶塵埃　無辺の佳景　塵埃を絶つ
珊瑚珠與金剛石　珊瑚珠と金剛石と

能動都人魂魄來　能く都人の魂魄を動かし来たる

桜洲は解説して「欧州ノ富豪、珊瑚金剛等ノ貴重ノ宝石ヲ愛玩スル最盛ナリ。パーレ、ロワヤールノ雑貨店ヲ往還スレハ又一個ノ博覧会ニ入ルカ如シ」という。つぎは第十二首。

戯綵生新沙德咧　戯綵は新らしきを生ず　沙徳咧（シャトレ）
清歌雑耍架西奴　清歌　雑耍（ざつさ）　架西奴（カジノ）
輕狂蛺蝶穿花慣　軽狂たる蛺蝶は花を穿（うが）つに慣れ
顛倒風前畫得無　風前に顛倒せしを画（えが）き得たるや無（いな）や

生新な芝居を上演する「沙徳咧」は、セーヌ河のシャンジュ橋北のシャトレ広場の東西に、1862年オスマン知事が完成させたリリック劇場とシャトレ座のうち、西のシャトレ座をいうだろう。そこでは大デュマの「二十年後」、ゾラの「ジェルミナール」、ジュール・ヴェルヌの「八十日間世界一周」などを上演したほかに、オペレッタ、ヴァラエティー・ショー、バレーの上演もあった。このときの芝居は不詳。「架西奴」は、モンマルトルの丘に登っていく途中にあるキャバレー「カジノ・ド・パリ」で、このとき「清歌」をうたっていたのは、ジャンヌ・アヴリルか。「雑耍」は雑技・曲芸である。「蛺蝶」は男性で「花」は女性だろう。第四句は、主にキャバレーなどの男女を描いたトゥールーズ＝ロートレックのような画家を想定しよう。つぎは第十三首。

湖亭借得曲欄憑　湖亭　曲欄を借り得て憑（よ）れば
士女如雲戯跑氷　士女は雲の如く戯むれて氷に跑（はし）る
多少追踪尋雪印　多少　追踪して雪印を尋ね
海龍護頸冷何曾　海竜　頸（くび）を護り　冷ややかなること何ぞ曾（か）つてあらん

自注には「湖水凝結し、女子は多く皮釘鞋（スケートぐつ）を以って氷上を行く」とある。そして「使俄草」巻三、正月十七日には「慶靄堂参使が午餐に邀（さそ）う。未正（午後２時）、同人と偕（とも）に大清公所に至り、略ぼ一たび遊覧す。雪景は蕭清、一に白くして極み無し。池氷は腹堅く、法人は競いて氷鞋を購いて、氷上を駛行し、往来すること織るが如し。即ち所謂る氷嬉（アイススケート）也」ともある。ここはブーローニュの森で馴化園近くにあった三日月形池の屋外スケート場。「海竜」はビーヴァーの毛皮、そのマフラー。つぎは第十四首。

加非得趣小排場　加非（カフェ）は趣きを得たり　小さく場を排し
渇解相如窈窕娘　渇きの解けし相如（しょうじょ）　窈窕たる娘
忽見名姝傳奥國　忽ち見る　名姝の奥国（オーストリア）より伝わりしを

滿身鑽石璨生光　満身の鑽石(ダイヤモンド)は璨として光を生ず

「排場」は舞台で上演すること。「相如」は、消渇の病があった漢の文人司馬相如。ここは粋な男性俳優をいうか。オーストリアから来た美女は、未詳。あるいはエミール・ゾラの「三都市叢書」最終作「パリ」（1898年）に「黄色いサテンのドレスを身にまとい、全身にちりばめたダイヤで星のように輝いている」と描写する貴婦人の客か。それともスペインから来た踊り子で宝石を身につけたラ・ベル・オテロか。つぎは第十五首。

髪鬆腰細眼横波　髪は鬆(みだ)れ腰は細く　眼は波を横ざまにし
六幅羅裙貼地拖　六幅の羅裙は地に貼りて拖(ひ)く
人在鏡中成幻影　人は鏡中に在りて幻影と成り
客來海外有行窩　客は海外より来たりて行窩(こうか)有り

舞台上の踊り子か、貴婦人の客か、乱れ髪、細い腰、セクシーな流し目、「六幅」３メートルほどに大きく広がる「羅裙」薄絹のスカートを床にくっつけて引きずっている。「フォリ＝ベルジェール」の立見席には巨大な鏡があったらしい。また主にイギリスやロシアなど「海外」からの「客」にとって有難いことに、そのまわりには無数の親切な「行窩」小ホテルがあった。

4

ここからは、ひきつづき潘乃光の「海外竹枝詞」の「巴黎雑詩」１０首を読むことにする。これらは主に歓楽の場所をうたう。まず第一首。

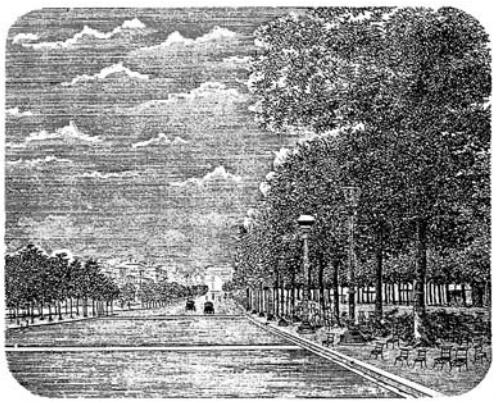

図4　シャンゼリゼ大通り（「回覧実記」巻42）

桑西利涉在當前　桑西利涉（シャンゼリゼー）は当前に在り
疑雨疑晴四月天　雨かと疑い晴かと疑う　四月の天
夏木千章圖畫裏　夏木は千の章あり　図画の裏（うち）
舞衫歌扇聚群仙　舞衫　歌扇　群仙を聚む

「使俄草」巻七、四月二十八日に「使館由（よ）り北行すれば、即ち拿破崙（ナポレオン）第一の紀功坊。坊の四周は間（へだ）つるに鉄道を以ってし、広さは半里可（ばか）り。衢路は縦横に交午し、約八九道。・・・再（さら）に過ぐれば則ち香水里賽（シャンゼリゼー）、道を夾みて槐と松と交（こも）ごも映じ、広衢は五道、亭台は四周。緑陰の下、士女は便嬛韶稚にして、並びに嬉娯自得す」とあり、王は「巴黎竹枝詞」第７首でその情景をうたう。

図5 凱旋門（「回覧実記」巻42）

桑西利涉大街頭　桑西利涉（シャンゼリゼー）の大街頭
屹立中央得勝樓　中央に屹立す　得勝楼
四達通衢信瞻仰　四達せる通衢　信（まこ）とに瞻仰す
表功有意抗千秋　功を表わして千秋に抗（あら）がう意有り

「得勝楼」は、エトワール広場の中央にそそり立つ凱旋門。ここからは四方八方放射状に通りが伸びている。ここで夜のシャンゼリゼーをうたった中井桜洲の「巴里斯雑詩」（「漫遊記程」巻下）をあげよう。

凱歌門向佛皇宮　凱歌門は佛皇宮に向かい
樹影燈光夜景紅　樹影　灯光　夜景は紅（くれな）いなり
欲問當年創業跡　当年創業の跡を問わんと欲すれば
奈翁廟畔月如弓　奈翁（ナポレオン）廟の畔　月は弓の如し

桜洲は解説して「チーウリ宮ハルーウル宮ト連接セル路易十四世及三世奈勃翁帝ノ宮殿ナリ。其前面フラス、デ、コンコルドノ方面ハ広濶清潔ヲ極メ其中央ニ直立スル「オブリスキ」ノ石柱ハ一石長サ十四間ニシテ埃及(エジプト)ヨリ遷セル奇石ナリ。此石柱ヨリ十八町ヲ隔テ遥ニ凱歌門ニ対シ左右緑樹陰森トシテ四条ノ大道ヲ通シ、各所ニ草草花園、噴泉器ヲ設ケ、数千ノ椅子ヲ排列シ、客ノ休憩ニ供シ、路傍ノ家屋峻麗高層ニシテ其尤盛ナル者ハ物品製作ノ展覧館ナリ。柱梁皆鉄ト石トヲ用ヒ蔽ノニ玻璃ヲ以テス。此辺尤繁華ナルヲ以テ歌舞(カヒーシャン)堂音楽台(タンジャルダンマビール)、灯火星ノ如ク是レヲ名ツケテ「シヤンゼリゼー」街ト云フ。此辺車馬絡繹トシテ昼夜ヲ分タス。士女雑沓肩摩シテ外国行旅ノ客一見以テ落胆眩目ス。一世奈勃翁ノ墓ハセイン河ノ傍ニアリ。墓上ノ尖塔ハ高ク空ニ聳ヘ、飾ルニ縷金ヲ以テス。実ニ人造ノ精妙ヲ尽シ経営セル都府ト謂ワサルヲ得ス」という。つぎは第二首。

紅燈旋轉磨盤高　紅灯は旋転し磨盤は高し
行氣如虹山駕鰲　行気は虹の如く山は鰲に駕す
歌舞場開男女混　歌舞場開きて男女は混じり
人聲和樂共嗷嘈　人声は楽に和して共に嗷嘈たり

「紅灯」は、1889年にモンマルトルに誕生したキャバレー赤い風車「ムーラン・ルージュ」の屋根の上に取り付けられた、夜は赤い灯にかがやく風車の翼。これはぐるぐる「旋」回「転」し、風車をささえる「磨盤」粉挽き臼のような風車小屋は高くそびえる。「行気如虹」は、唐の司空図の作とされる「二十四詩品」の「勁健」に「神を行うは空の如く、気を行うは虹の如し。巫峡は千尋、雲を走らせ風に連なる」とあり、あたり一面に虹のごとく鮮やかな灯火がぐるぐる駆け巡る。その全体は「鰲」巨大な海亀にささえられた蓬莱などの仙山のようにそびえ、また灯篭を山形に重ね、音楽や舞を行った山車のようでもある。この「歌舞場」ムーラン・ルージュは、歌・ダンス・フレンチカンカン・大道芸を組み合わせたショーが人気だった。王之春の「巴黎竹枝詞」第６首も歌舞場をうたっていう、

暮色蒼茫海氣清　暮色蒼茫として海気清く
電光煤火爛如星　電光　煤火　爛として星の如し
飛車一去不知遠　飛車　一たび去(ゆ)きて遠きを知らず
跳舞場開雅楽聴　跳舞場開きて雅楽を聴く

「海気」は海面にたちこめる霧。ここはセーヌ河の霧か。夕暮れの街に輝く「電光」は電灯、「煤火」はガス灯。つぎは第三首。

聲色迷人少向隅　声色　人を迷わせ　隅に向かうもの少なく

待尋佳勝嘎西奴　佳勝を待尋す　嘎西奴(カジノ)
茶清酒苦供歡笑　茶は清く酒は苦くして歓笑に供し
兩部曾聽鼓吹無　両部　曾つて鼓吹を聴きしや無(いな)や

「向隅」は、漢の劉向の「説苑」貴徳篇に「今堂に満ちて酒を飲む者有り。一人の独り索然として隅に向かいて泣く者有らば、則ち一堂の人皆な楽しまず」とあり、楽しまないことをいう。「嘎西奴」は、「架西奴」と同じく、カジノ・ド・パリをいう。「両部」の「鼓吹」は、坐・立の両部の楽隊が演奏する気勢浩大な音楽で、南朝斉の孔稚珪は、庭の蛙の鳴き声をとがめられ、「我れは此れを以って両部の鼓吹に当てん」といったという。つぎは第四首。

歐蘭必雅品茶來　欧蘭必雅(オランピア)　茶を品し来たり
歡喜場中錦繡堆　歓喜場中　錦繡堆(つ)む
各出心裁巧裝束　各おの心裁を出だし巧みに装束し
蜂狂蝶浪不須媒　蜂は狂い蝶は浪(みだ)りにして媒を須(もち)いず

「欧蘭必雅」は、大ミュージックホール「オランピア」。「錦繡」は、すばらしい模様・色合いを織り成したカーペット。第三句は、仮装舞踏会をいうか。つぎは第五首。

燈光排闥賣加非　灯光　闥を排して加非(カフェ)を売り
滿座生春逸興飛　満座　春を生じて逸興飛ぶ
亜美哩干推獨歩　亜美哩干(アメリカン)　独歩と推(お)し
評量燕瘦與環肥　評量す　燕瘦と環肥とを

「亜美哩干」はアメリカン、つまりアメリカ人で、ここミュージックホール「フォリ＝ベルジェール」で人気の寄席芸人マリ＝ルイーズ、通称ロイ・フラー嬢をいおう。夢幻的照明を活用し、きらめく光の仙女的世界をバックにして蝶のごとく踊りまわった彼女は、「独歩」匹敵するもの無しと推奨され、「燕瘦」痩せ細った漢の趙飛燕みたいに軽やかだとか「環肥」肥えてふっくらした唐の楊貴妃玉環みたいに華麗だとか「評量」品定めされた。つぎは第六首。

近街樓畔有桃花　街に近き楼の畔に桃花有り
演劇臺中幻綵霞　劇を演ずる台の中に綵霞を幻ず
記得名班沙徳咧　記し得たり　名班の沙徳咧(シャトレ)
大家安坐悄無譁　大家(みな)は安坐し　悄として譁(かま)びすしき無し

「名班」有名な劇団たる「沙徳咧」シャトレ広場のシャトレ座で上演していた、「綵霞」きらびやかな夕焼けを「幻」出させていた演目は、不詳。つぎは第七首。

天生龍女善騎獅　天の生みし竜女は獅に騎(の)るを善くし
爪舞牙張聽指揮　爪舞い牙張りて指揮を聴く
夫哩八些新演出　夫哩八些(フォリベルジエール)は新たに演出すれば
早來訂座不宜遅　早く来て座を訂(さだ)めよ　宜しく遅るるべからず

自注には「五獅の甚はだ馴れし有り」とある。爪を振り回し牙をむく五頭のライオンを自在にあやつる「天生竜女」は、未詳。あるいはサーカス団フェルナンド座（シルク・フェルナンド）かフランコーニ座のライオン使いの美女が来演したか。「夫哩八些」は、モンマルトル大通りの北にあるミュージックホール「フォリ＝ベルジェール」で、マネの名画でも知られ、遊歩回廊の立見席が有名だった。つぎは第八首。

冪天席地大花園　天を冪(おお)いとし地を席とす　大花園
雅樂成聲人不喧　雅楽　声を成し　人は喧(かま)びすしからず
最是二三更後好　最も是れ二三更後が好ろし
品茶女伴尚開軒　茶を品する女伴は尚お軒を開く

「大花園」は野外ダンスホール。「使俄草」巻六、三月二十一日、復活祭の記述に「城を傾くる士女は相い率いて城南の大花園に出で遊覧し、談飲楽を為す。車と茵(しとね)と相い接し、耳と鬢と相い磨し、大いに黼(あやふく)は子の佩(おびだま)に連なり、釵(かんざし)は臣の冠に挂かるの意有り。園中には大花木無くして、広く各樹を植え、馬路の四もに闢くに過ぎざる而已(のみ)。法人は其の中に於いて、地を掘りて河と為し、寛さは十丈可り、長さは約二里。其の尽くる処は石を畳みて山と為し、下に機輪を置き、水を激して瀑布と作し、雅(つね)に観覧す可し。園亭に小坐し、茗酒随いて啜るに、軍士は鼓笳を其の旁らに奏す。異方の楽は、人の忉怛を増すと雖も、而るも風に臨める一曲は、亦た耳に盈ちて洋洋たるを覚ゆ」とある。「黼連子佩」は「詩経」秦風「終南」に「君子は至り止まり、黼(ふい)衣繡裳、佩玉(はいぎょく)将将たり」、「釵挂臣冠」は漢の司馬相如の「美人の賦」に「玉釵は臣の冠に挂かり、羅袖は臣の衣を払う」とある。「瀑布」は噴水をたとえる。「臨風一曲」は、宋の范仲淹の「岳陽楼記」に「斯の楼に登る也(や)、則ち心曠(あき)らかに神怡(よろ)こび、寵辱皆な忘れ、酒を把(と)りて風に臨み、其の喜びは洋洋たる者有り」とある。また、かれ王の「巴黎竹枝詞」第５首もうたっていう、

品茶随處有加非　茶を品するは随処に加非(カフェ)有り
士女如雲逸興飛　士女は雲の如く　逸興飛ぶ

時過三更聲擾擾　時は三更を過ぎて声は擾擾たり
參横斗轉不言歸　参（オリオン座）横たわり斗（北斗七星）転ずるも帰るを言わず

つぎは第九首。

西天亦有譜霓裳　西天にも亦（ま）た霓裳（げいしょう）を譜する有り
色藝生新雅擅場　色芸　新しきを生じて雅（つね）に場を擅（ほし）いままにす
第一知名歐白辣　第一　名を知る　欧白辣（オペラ）
大哉祇許贊洋洋　大なる哉　祇（た）だ洋洋たるを賛するを許すのみ

「霓裳」は、唐の玄宗皇帝が仙人と天に上り月宮で聞いて覚え帰り楽人に作らせた、天女を歌う霓裳羽衣曲をいう。それに匹敵する西洋の「色芸生新」なオペラを観劇したのは、パリで一番に有名な「欧白辣」オペラ座、当時は国立オペラ劇場だった。その雰囲気は、豪華なオペラと相まって、「大なる哉」「洋洋」りっぱで美しいと「賛」嘆するしかなかった。「使俄草」巻六、三月十二日に「後慶靄堂が邀（さそ）いて法国の国家大戯院に赴き、劇数折を観せしむ。帰途雨に遇う」オペラ座でオペラ数幕を観た、とあり、潘も同行したのだろう。オペラ座では、1894年３月１６日からマスネーの新作「タイス」を上演しており、潘たちが観たのはこれかもしれない。オペラ「タイス」は、紀元４世紀ごろのアレクサンドリアでの娼婦タイスと修道僧バフニュスとの愛と葛藤を描くが、「色芸」エロチックで魅力的なタイスは、玄宗の天女にふさわしい。つぎは第十首。

大會場同校武場　大会場は校武場と同じく
塔邊河上氣飛揚　塔辺河上　気は飛揚す
俄都新到多神駿　俄都より新たに到れるは神駿多し
看會嗤他擧國狂　看れば会（かな）らず嗤うべし　他（か）の国を挙げて狂えるを

「大会場」とは、エッフェル塔の西、セーヌ河沿いのブーローニュの森にあったロンシャン競馬場。そこは1900メートルと2800メートルの２コース、パドック、五千人収容の観客席、ビュッフェ、食堂などをそなえ、パリの貴族も庶民もみな押しかけて熱狂し、まさに「武」芸を「校」くらべる「場」、闘技場、コロシアムと同じだった。第三句、ロシアの首都サンクト・ペテルブルグからやって来たばかりの競走馬には優駿が多い、については、「使俄草」巻七、四月二十五日に「俄人は巴黎の西偏に於いて賽馬廠（けいばじょう）を創設し、経営締造す。規模も亦た甚はだ宏敞なり。本日は開賽の期為（た）りて、余は参随等を率い往きて観る。約共に九十余馬を賽（きそ）わしむ。俄の兵弁の見（あ）いし者は皆な冠を免（と）りて敬を致し、益ます以って西人の整飭武備の中に於いて敬礼邦交の義を寓するを見る」とある。「挙国狂」について、

王の「巴黎竹枝詞」第１０首は、別の面から分析していう、

合衆開闠賽馬時　衆を合(あつ)め闠を開き馬を賽(きそ)わしむ時
華林馬射不爲奇　華林の馬射も奇と為さず
君籌武備民同樂　君は武備を籌(はか)り　民は楽しみを同じうし
隠寓歐西節制師　隠に寓す　欧西節制の師

「華林馬射」とは、北朝周の武帝が華林園に行幸して行った大射の礼。同行した詩人庾信は「三月三日華林園馬射の賦」でその盛大な有様を「千乗雷のごとく動き、万騎雲のごとく屯(たむ)ろす。落花は芝蓋と同(とも)に飛び、楊柳は春旗と共に一色なり」とうたう。それさえもロンシャン競馬に比べれば「奇」すばらしいとはいえない。君主は武備を意図し、民衆はみな楽しんでいる。じつは「欧」州の「西」フランスの「節制」節度規律ある「師」軍隊の育成訓練を隠しているのだ。王は同じく四月二十五日の「賽馬行」でも「欧西は武備を事とし、磐控　遥程に飛ぶ。繮を絶ちて奔電より迅(はや)く、春に当たりて乃ち盛行す。天池の竜種　阿刺伯(アラブ)、星精の上駟　巴黎(パリ)城。桃花叱撥　一瞥の間、顧盼すれば自のずと雄なり何んぞ精を専らにするや。馳驟　那(な)んぞ千万匹に止まらん、国を挙げて狂うが若く斉盟を同じうす」とうたう。

さて、ここまで潘乃光のパリの「竹枝詞」を読んできたが、その特徴は、劇場やキャバレーなど歓楽の場所を詠じたものがとりわけ多いことである。それは本来の「竹枝詞」の傾向にかなうものであり、潘の個人的嗜好にもあったものだろう。出使大臣たる王之春の「竹枝詞」には公使館近くの教会の様をうたった作が３首、三月二十一日の「巴克節」復活祭をうたった作が１首あるのに対し、潘にはキリスト教関係の作が１首も無いことも、そのあたりの差異を裏付けるだろう。しかしこれは、出使大臣という国家の威信を背負った立場と、その随員にすぎない気楽な立場との差異かもしれない。また、日本の中井桜洲の４首しかない「巴里斯」の「竹枝」「雑詩」が武士の矜持を保って、詩興も無視はしないができるだけ事実を伝えようとするのに比べると、潘や王の作はやはり清国の詩の気分が勝っているように思う。

以上は、「海外竹枝詞」のうちのパリをうたった部分だけから、いちおう帰納してみたわけだが、わたしはこの後、潘乃光のいわゆる四都竹枝詞の残された歌、つまりベルリン、サンクト・ペテルブルグ、ロンドンの歌も読み進めていくつもりなので、さきにのべたのはあくまで途中経過であり、最終的な結論は四都すべてを分析したうえで出すことにしたい。